

「伝え遺してゆくこと」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 震災追悼アセンブリーで生徒に伝えたこと

昨年は阪神淡路大震災から30年ということで、多くの追悼行事がありました。私も前任校で追悼行事があり、そこで話を依頼されました。最初は原稿を書いていました。でも、どれだけ言葉を尽くしても『震災を経験した私から、震災を経験していない皆さんへ』となってしまうのです。説教くさいというか、昔話を後世に押しつけていると言うか。何度も書き直してはみたものの、結論は「これじゃあ、何も伝わらないな」との思い。では、今を生きる生徒たちに、私が感じたあの切迫感を伝えるにはどうすればよいのか。結論は30年前の自分に頼ることでした。そして今年も再び私はかつての自分に頼ることにしました。

阪神淡路大震災から31年が経過しました。神戸高校では2人の生徒と、1人の先生が生命を落としました。先ほど、3回鐘を鳴らしたのはこの3人のご冥福をお1人ずつ、お祈りするためのものです。

さて、その年、僕は西宮市内の高校で2年生の担任をしていました。当時の僕は学級通信を書くのが大好きな担任でした。その頃のファイルをひらくと、震災のあった当日「1995年1月17日付け」の学級通信があります。でも、それは準備していたものの、朝5時46分にマグニチュード7.3にして、6434人の生命を奪う地震があり、誰ひとり登校ができないままに学校は休校。結果として配ることができなかった幻の学級通信です。そして次の号の日付は1月25日となっています。それは震災後の初の登校日の翌日、配ったものですから、1週間は学校を開けられなかったということになります。

今日はこの1月25日付けの学級通信の一部を読ませてもらいます。27歳だった僕が、17歳の生徒に向けて書いた通信です。タイトルは『今、いちばん考えておいてほしいこと』

地震の直後、僕は完全にタンスの下敷きになっていた。部屋中のタンスが全て僕に倒れかかって、そのうちの一つは頭を直撃していた。やばいな、そう思いながらもそこから抜け出すのに随分と時間がかかった。妻は殆どパニック状態になりながら、その脱出を助けてくれた。僕らはとにかく手探りで車のキーを見つけると、すぐに暗闇の中へ出た。古い木造の妻の実家が気になったからだ。

車を走らせる。人々が右往左往しているものの、尼崎市内は比較的落ち着いていたように思う。橋を渡り、西宮へ。そこで僕はすっかり崩れきった妻の実家を見つけた。泣き叫ぶ妻の肩を叩きながら、車を止めて降りた。庭におとうさんがいた。おかあさんはまだ家から出られないでいた。

『いや、なんとか僕一人でも出せる。それより泰子（妹）を病院に連れていったってや』そう、おとうさんが言う。泰子はあちこちから血を流している。タオルで縛って、車に乗せ、病院を探した。

兵庫医大の大学病院なら空いているだろう、そう考えて南を目指すけれど甲子園口の駅前は、倒壊したビルが塞いでいて通り抜けることができない。僕らは仕方なくUターンをする。僕の足はようやく震えだした。泰子の血は止まらない。僕らは行き先を市民病院に変えた。亀裂の入った路地をいくつもすり抜け、ようやく病院に着く。でも、本当の意味での辛い時間は、その時はじまった。

明かりのつかない病院の暗い待ち合い室はたくさんの人ばかり、そこで僕らは順番を待つ。次々と人が運ばれてくる。泣き声と叫び声が交錯する。『助けてやってください…』『誰か、血を止めて下さい…』『お願いします…』そんなパニック状態の中で、一人二人と亡くなっていかれる。

僕は泰子の腕などに巻いたタオルを時折緩めては、またきつく縛る。なんとか血を止めなくちゃいけな

い。お医者さんの姿は僅かしか見えない。そこに患者は長蛇の列。順番が来るまで何時間かかるか分からない。果たして、応急処置をしてもらった時はもう昼時だった。泰子の血は止まった。でも生死のやりとりをさんざん見せつけられた僕らの目は真っ赤に腫れていた。いったい、これからどうしよう、僕らはそんなふうによりやく途方に暮れることができた。

妻の実家に戻ると、無事におかあさんも助けられていた。みんなで近くの親戚の家に避難する。『家財道具を出さなあかなあ』そんなふうにおとうさんが言う。そこで僕らはもう一度、ほぼほぼ崩れてしまった妻の実家に戻る。形の残っているところから、出せる家財道具を取り出す。柱がきしむ度、背筋が凍る。そんな作業が5日続いて、土曜日には終わった。その日の午後、家は急に揺れだして、やがて完全に崩れてしまったのだ。一階と二階とを繋いでいた一本の電線、それを切って20分後のことだった。

寒くて暗い病院の待合室で最後のため息をついて、亡くなっていった多くの人のことを思う。完全に崩れてしまった妻の実家の跡を見ながら、その中から生を掴みとった妻の家族の奇跡を思う。生と死が紙一重であること、今の僕にはよく分かる。生きているということを、心から感謝できる。そして君らが生きていることを、心から感謝している。

月曜日、君らの顔を見て、本当にホッとした。でも僕は随分と傷ついている部分もある。そのことについて書く。僕はこの地震のあとで、うまく笑えなくなっている。

もちろんこの地震で、なんの痛みも感じなかった人がいても、別に僕に責める権利なんてない。でも、君らの周りには親を亡くした人がいる。兄弟を亡くした人がいる。おじさんを亡くした人もいるし、おばあちゃんを亡くした人もいる。家を失った人もいる。教科書とか制服とか、そんな自分の持ち物全てをなくした人がいる。家の人が職を失って、生活の基盤を失った人もいる。

本当に色々な人がいる。だからせめてデリカシーを持ってください。君らの一人一人がどんなことを思うか、そんなのはもちろん個人の自由。でも何気なく言った一言でも、それが聞いている人をどれだけ傷つけることがあるか、それだけは覚えておいてください。人の心を平気で土足で踏みにじるような、そんな人間にだけはなってほしくないねん。

学校の再開には、もう少し時間がかかる。どうか有意義に使ってな。地域の体育館や水道局なんかは、家を失った人の避難所となっているけれど、もうすでに君らの同級生がボランティア活動をしている。でも、まずは家の手伝い。水を運ぶ、それだけでも随分と役にたつはず。

そして、もしも時間が余ったら、自分の母校にでも顔を出してみて。そこにも君らの力を必要としてくれる人が必ずいる。君らだって、学校なんかよりよっぽどいい勉強ができるはずだから。

ともあれ、君らが生きていて本当によかった。こうして再び会えて、本当によかった。僕はもうしばらく家や妻の実家の片付けを続けます。

お互いに人間的にひとまわり大きくなって、1週間後の次回の登校日、来週月曜にまた逢いましょう。

以上が僕の当時の学級通信です。この震災により、僕のクラスの生徒のうち14人が家を失いました。でも、みんな生きていてくれました。そのことを心から喜んだ一方、多くの方が亡くなられていくのを僕は目にしました。「まだまだ生きていたい」そう強く願いながらも叶えることができなかった生命がそこにあり、「ありがとう」も「さようなら」も伝えられないままの別れが、そこにあったのです。

どうか今ひととき、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、皆さんには1日1日を大切に生き抜いてほしいと、心から願っています。以上、追悼の言葉といたします。

生きることを強く望みながらも叶わなかった方々がおられたということ、「ありがとう」さえ伝えられない別れがあったということ、そして今を生きていることの大切さ、ありがたさ。

阪神淡路大震災を愛すべき生徒たちとともに経験した教員として、伝え遺してゆくことは私の使命のひとつだと考えているのです。

